

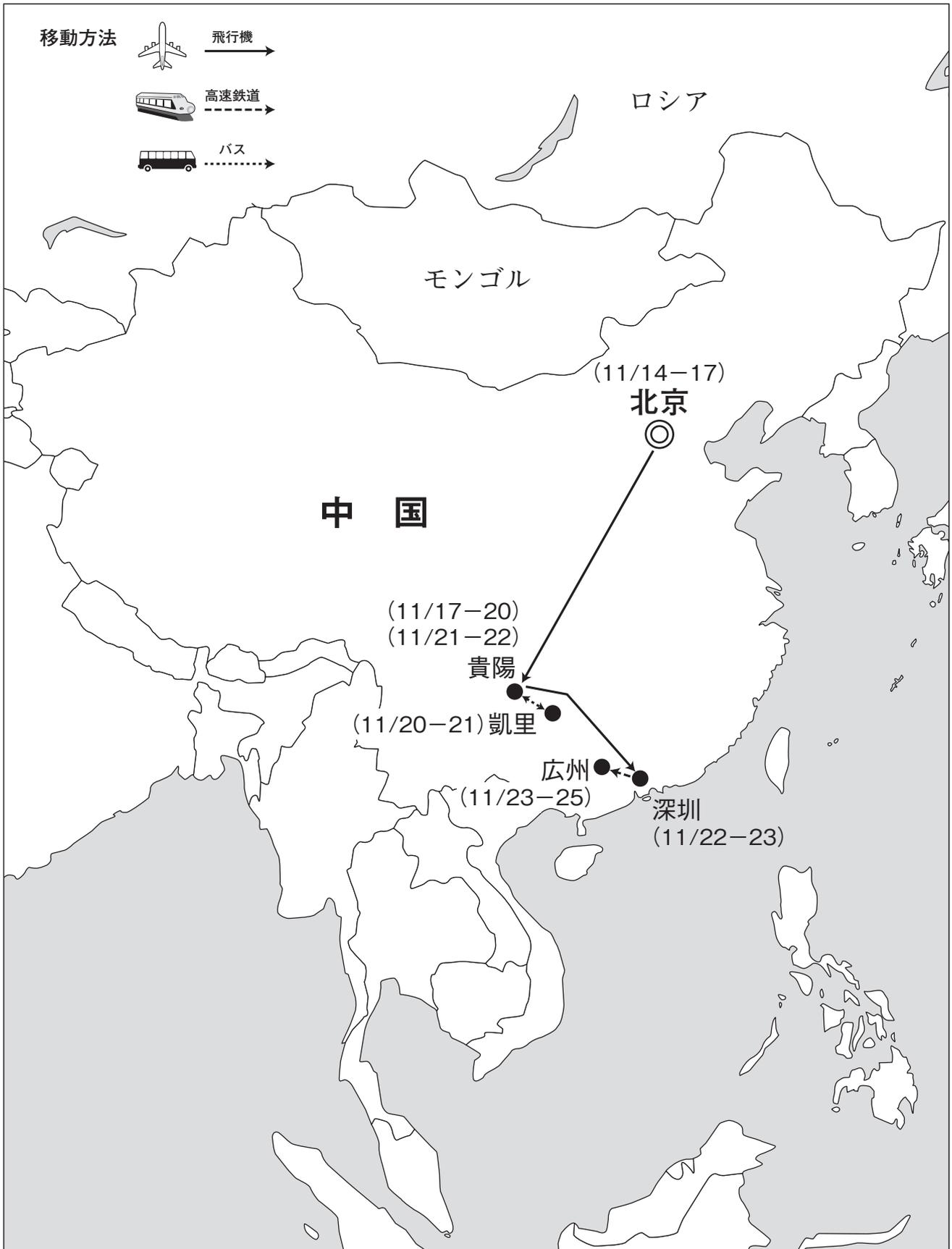
第2章 日本青年中国派遣

行動地図
行動記録
訪問先一覧
団長報告
参加青年代表報告
ディスカッション成果



行動地図

平成29年度 日本青年中国派遣



行動記録

平成29年度 日本青年中国派遣

	月日	時間	行動日程	滞在都市
1	11月14日 (火)	9:10 12:05 14:30 17:45-19:40	東京(羽田)発(JL021) 北京着 ホテル着 伍偉中華全国青年連合会副秘書長主催歓迎会	東京 北京
2	11月15日 (水)	9:30-10:55 11:05-12:00 12:50-15:50 16:00-17:00 17:15-19:05	在中国日本国大使館表敬訪問 ・日中関係、日本国大使館の役割についての講義 ・質疑応答 昼食 北京大学交流座談会 ・グループディスカッション(起業とボランティアについて) ・ディスカッション発表 ・キャンパス見学 中関村起業通り視察 夕食	
3	11月16日 (木)	9:00-12:30 12:30-13:40 14:30-15:40 16:00-17:45 18:10-19:40	日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラム(21世紀飯店) ・松田敏明団長のプレゼンテーション 中華全国青年連合会主催歓迎レセプション ・団員によるソーラン節披露 汪鴻雁中華全国青年連合会副主席表敬訪問 天安門、前門散策 日本訪問団既参加青年との交流夕食会	
4	11月17日 (金)	9:15 12:15 13:15-14:15 14:45-16:00 16:10-17:40 18:35	北京空港発(CZ3682便) 貴陽空港着 昼食 貨車幫有限公司視察 孔学堂視察、儒家文化体験 夕食	↓ 貴陽
5	11月18日 (土)	9:20-10:25 10:50-11:20 13:00-13:40 15:00	恵水県好花紅村視察(貧困脱出プロジェクト地) 恵水県百鳥園デジタルタウン視察 昼食 ホームステイマッチング	
6	11月19日 (日)	18:00	ホストファミリーとの交流夕食会	
7	11月20日 (月)	8:00 11:50-12:30 12:30-13:20 13:25-13:50 14:10-15:35 16:00-16:55 16:55-18:10 18:20-19:30	凱里市黔东南苗族侗族自治州へ移動 凱里苗族民族文化刺繡ろうけつ染め伝習体験所視察 昼食 凱里学院学生イノベーション起業センター視察 凱里学院黔东南州博物館、美術・設計学院視察 凱里インターネットパブリックイノベーションパーク 黔茶故事など視察 未来城コミュニティユースハウス視察 夕食	↓ 凱里

	月日	時間	行動日程	滞在都市
8	11月21日 (火)	8:10 9:05 10:30 13:45 15:00-17:00 18:00	雷山県へ移動 西江千戸苗寨 ^{ミャオ} 視察 貴陽へ移動 昼食 貴州省青年連合会代表との座談会 夕食	凱里 ↓ 貴陽
9	11月22日 (水)	7:40 8:05 10:50 12:15 13:35 15:05 16:00 18:20 19:00	ホテル発 空港着 貴陽空港発 (CA4367便) 深圳空港着 昼食 前海深港合作区へ移動 前海地区展示場、前海深港青年夢工場視察 錦繡中華民俗文化村到着、夕食 パフォーマンス鑑賞	↓ 深圳
10	11月23日 (木)	10:30-11:15 11:40-12:30 12:50-13:40 14:05-14:45 15:20 16:25 17:01 18:30 19:50	騰訊会社 (テンセント) 視察 大疆創新科技有限公司 (DJI) 視察 昼食 深圳港企業広場視察 深圳北駅へ移動 深圳北駅発 (高速鉄道) 広州南駅着 夕食 花城広場、海心沙島 (アジア競技大会開会式会場) 散策	↓ 広州
11	11月24日 (金)	9:40 10:45-11:55 12:10-13:20 14:00-16:00 16:05-17:10 18:00-20:00	ホテル発 广汽本田汽車有限公司 (広州ホンダ) 視察、社員との交流会 昼食 中山大学学生交流会 ・中山大学のプレゼンテーション ・質疑応答 ・ボランティアと起業について (分科会) 中山大学キャンパスツアー (グループ別) 広東省青年連合会主催歓送会	
12	11月25日 (土)	11:00 12:20 14:35 18:50	昼食 広州白雲国際空港着 広州発 (JL088) 東京 (羽田) 着	↓ 東京

訪問先一覧

平成29年度 日本青年中国派遣

北京

11月14日

伍偉中華全国青年連合会副秘書長主催歓迎会

面会者	伍偉 (Wu Wei) 中華全国青年連合会副秘書長 在中国日本国大使館参事官
訪問概要	中華全国青年連合会 (全青連) 関係者や在中国日本国大使館参事官等と夕食を共にし、日中に関する意見交換を行った。

11月15日

在中国日本国大使館

面会者	広報文化部長 参事官 二等書記官
訪問概要	広報文化部長及び参事官から最近の日中関係や大使館の役割についてお話を伺い、中国の急速な経済発展に改めて気付くことができた。また、今後の更なる日中関係の相互発展のために、私たちには何ができるかを考えさせられた。

北京大学

訪問概要	北京大学は中国初の国立総合大学として1898年に創設された、国内でもトップクラスの教育水準を誇る大学である。日本青年と北京大学の学生が六つのグループに分かれ、二つのテーマ「起業」と「ボランティア」についてディスカッションをした。その後、北京大学学生の案内により学内を散策した。その中で、日中両国の転職に対する意識の違いやボランティア活動における概念の共通点などが発見でき、有意義な時間となった。
------	---

中関村起業通り

面会者	マーケティング部グローバルインキュベーションスペシャリスト グローバルインキュベーションサービス部シニアマネージャー (部長)
訪問概要	中関村起業通り (Inno Way) を視察した。Bingoo 咖啡という起業家向けのカフェ及びオフィスや世界中の起業家が集まるInno Planetなどを見学した。中国の起業家への支援やアイデアをシェアできる場があることを学び、起業に対する積極性を感じた。

11月16日

日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラム

出席者	汪鴻雁 (Wang Hongyan) 中華全国青年連合会副主席 伍 偉 (Wu Wei) 中華全国青年連合会副秘書長 周秉徳 (Zhou Bingde) 元全国政治協商会議委員 鳩山由紀夫 前内閣総理大臣
訪問概要	日中国交正常化45周年を記念し、21世紀飯店にて中華全国青年連合会主催による日中青年交流フォーラムが行われた。鳩山由紀夫前内閣総理大臣や、周恩来の姪である周秉徳氏による基調講演の後、「日中関係発展のために青年交流は何ができるか」をテーマにパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションでは、松田敏明団長より「内閣府日本・中国青年親善交流事業から見た青年交流の役割」についてのプレゼンテーションが行われた。本フォーラムを通して、日中友好の歴史的な歩みを学び、日中関係の更なる発展のためには日中の青年同士が積極的に交流を続けることが大切だと感じた。

中華全国青年連合会

面会者	汪鴻雁 (Wang Hongyan) 中華全国青年連合会副主席 伍 偉 (Wu Wei) 中華全国青年連合会副秘書長
訪問概要	汪鴻雁中華全国青年連合会副主席を表敬訪問した。中華全国青年連合会は、中国共産主義青年団を核とする各青年団体の連合組織である。汪副主席から、全青連及び第19回中国共産党全国代表大会での習近平国家主席の報告に関するお話を伺った。その後の質疑応答の時間で、中国共産党についての理解を更に深めることができた。

貴陽・凱里

11月17日

貨車幫有限会社

面会者	公共事務部マネージャー
訪問概要	中国全土のビッグデータを持つ貴州で、物流系のIT企業である貨車幫有限会社を訪問した。一日の物流量などを表したパネルや今後の事業プランを示す模型、コールセンターなどのオフィスを見学した。

孔学堂、儒家文化体験

訪問概要	貴州で孔子の教えを広めるために建てられた孔学堂を見学した。青少年を育成する場としての、孔子を始めとした弟子の像を視察した。また孔子展覧会を見学し、孔子の生涯について学んだ。世代代に渡り弟子が孔子の教えを受け継いだように、この事業を通して日中友好を世代代に結んでいきたいと感じた。
------	---

11月18日

恵水県好花紅村

訪問概要	好花紅村は、政府主導の貧困対策プロジェクトのモデル村である。好花紅村に住んでいるのは主に少数民族の布依族である。そこでは、伝統的な儀式や歌の披露があり、蜜柑や卵の首飾りをつけてもらうなどの体験ができた。また、建物の内装やろうけつ染めを見学し、少数民族に対する理解を深めることができた。
------	--

恵水県百鳥園デジタルタウン

訪問概要	貴州政府はビッグデータ産業に力を入れており、新たな産業地区のモデルである百鳥園デジタルタウンを建設した。タウン内では、シャープのサービスセンターや百度（Baidu）の支社の見学のほか、貴州の紹介ビデオを鑑賞した。ビッグデータ産業の応用という新たな分野での発展が続いている貴州を知ることができた。
------	---

11月19日

ホストファミリーとの夕食交流会

面会者	貴州省青年連合会主席 貴州省青年連合会副秘書長
訪問概要	お世話になったホストファミリーの方々と一緒に夕食を楽しんだ。日本側からはソーラン節、日本についてのクイズ、合唱（ふるさと）を披露した。中国側からも踊りや太極拳、合唱等で歓待を受け、最後には手をつないで「朋友」を歌い、今後の日中友好を誓った。

11月20日

凱里苗族民族文化刺繡ろうけつ染め伝習体験所

訪問概要	苗族民族文化刺繡ろうけつ染め伝習体験所は、苗族民族文化遺産博物館と隣接しており、中国南西部で唯一の少数民族博物館施設である。館内では苗族の伝統的な刺繡作品や銀の装飾品などを鑑賞した。また、体験所では苗族の無形文化遺産の一つであるろうけつ染めを体験することができた。
------	--

凱里学院学生イノベーション起業センター

訪問概要	世界的に高く評価されているろうけつ染めの工房や展示室を見学した。主に凱里学院学生が制作した作品が展示されている。また、実際にろうけつ染め職人の作業風景を間近で見ることができ、職人の技術力の高さに感心した。
------	--

凱里学院黔东南州博物館、美術・設計学院

面会者	凱里学院青年委員会書記
訪問概要	牛の角がシンボルである凱里学院内にある黔东南州博物館と美術・設計学院を見学した。黔东南州博物館では自然と民族文化に関する資料が展示されており、貴州の文化について学んだ。少数民族にとって自然は生活の一部であることを感じた。美術・設計学院では工作室や刺繡室、陶芸実践室などを視察した。

凱里インターネットパブリックイノベーションパーク 黔茶故事など

訪問概要	凱里インターネットパブリックイノベーションパークでは、主に地方にあるEコマースのベンチャー企業向けのサポートサービスを行っている。その中で、大学生が起業した黔茶故事や農村淘宝（ショッピングウェブサイトの運営会社）などを視察した。人材トレーニングや研修も開催されており、企業環境が整っていると感じた。
------	---

未来城コミュニティユースハウス

面会者	未来都市コミュニティ党委員会書記
訪問概要	未来城コミュニティセンターは凱里市の一部の地区を管理している場所である。その地区に住む住民は、アプリを使って災害の情報を得たり、問題が発生した場合は住民の側からセンターに連絡している。また、コミュニティユースハウスでは、寄付された古着をホームレスや出稼ぎにきている人に提供している。服が保管されている場所は24時間開いており、必要な人が自由に持ち出せる仕組みが整っている。アプリを有効活用した新しい形の都市開発を見ることができた。

西江千戸苗寨

訪問概要	雷山県にある西江千戸苗寨 ^{ミャオ} を見学。西江千戸苗寨 ^{ミャオ} は苗族最大の集落と言われている村である。2千年前に中国各地から移り住んできた苗族の人々が、現在も実際に生活している場所である。苗族の伝統的な生活様式や、山の斜面に立ち並ぶ木造の高床式建築などを見学することができた。また、展望台から眺めた集落全体の情緒ある風景に感動した。
------	---

貴州青年連合会代表との座談会

面会者	貴州省青年連合会主席 副秘書長
訪問概要	中国青年16人と日本青年21人で「起業」と「ボランティア活動」についてのディスカッションを行った。起業については、健康産業に力を入れていることや、ボランティアでは、社会問題解決のための様々な活動を政府が率先して環境を整えていることが分かった。

深圳

11月22日

前海地区展示場

面会者	香港事務局員 香港事務局長補佐
訪問概要	深圳市前海深港サービス業協力区管理局により建設され、前海自由貿易区の設立経緯や全体計画、建設・発展の状況を展示している前海地区展示場を視察した。また、センター内の特別プロジェクト計画ホールなどを訪れ、香港、マカオ、深圳のエリアで協力しながら中国の経済を発展させていることを学んだ。

前海深港青年夢工場

面会者	秘書長補佐 副秘書長
訪問概要	深圳、香港及び世界中の青年による起業を支援し、青年が起業の夢を実現するための国際的プラットフォームである前海深港青年夢工場を視察した。工場内にあるオフィスも見学し、開発中のアプリや実際に販売されている商品を手にとって体験することができた。

錦繡中華民俗文化村

訪問概要	民族文化ショーを鑑賞した。中国各民族のオリジナリティに富んだ演出になっており、少数民族の特色を実際に目で見て感じる事ができた。
------	---

11月23日

騰訊会社 (テンセント)

面会者	公共政策部支配人
訪問概要	1998年に創立したテンセントは、IT・ネットサービス分野で急成長を遂げており、時価総額はGoogleやFacebookなどと並ぶ国際的な大企業である。代表的な開発としては、SNSアプリの「QQ」や「WeChat」などが挙げられる。ビッグデータを利用した最新の都市サービスシステムなどを視察した。

大疆創新科技有限会社 (DJI)

面会者	DJI政府事務部部門責任者
訪問概要	2006年に創業し、民生用のドローン市場で世界シェアの7割を占めているDJIを視察した。DJIがこれまで開発してきた製品の紹介や、新商品の家庭用ドローンが実際に飛行しているところを見学した。常に最新技術を取り入れ、ニーズに合った製品開発に取り組んでいると感じた。

深圳湾起業広場

面会者	応接担当
訪問概要	深圳ハイテク開発産業区の中心に位置する深圳起業広場を視察した。19のビルからなる区画で、現時点では300社ほどが進出している。中にはアリババや百度 (Baidu)、テンセントなど中国を代表する企業の拠点もある。投資企業が集結していることから、起業をしやすい環境が整っている。中国で最も発展スピードの速い都市である深圳をより深く知ることができた。

広州

11月24日

广汽本田汽車有限会社 (広州ホンダ)

面会者	団委書記
訪問概要	広州ホンダは1998年に本田技研工業が广汽集団との合併で設立した中国で四輪自動車の製造と販売を行う会社である。中国市場において、初めて外資との合併会社による自主ブランドを展開した。工場内を見学し、社員との交流を通して中国の自動車における今後の展望について伺った。

中山大学

面会者	団大学委副書記
訪問概要	中山大学は、中国教育部直属の国家重点大学である。孫文の功績を称えて、孫文の号である中山を冠して命名された。ディスカッションではグループに分かれ、「ボランティア」「起業」をテーマに意見交換を行った。その後、中山大学生らの案内でキャンパス内を散策し、日中青年同士の交流を深めた。

広東省青年連合会主催歓送会

面 会 者	党委書記
訪 問 概 要	広東省青年連合会の方々や中山大学の学生臨席の下、歓送会が開かれた。古琴の演奏や中山大学日本語学科学生による日本の楽曲のパフォーマンスが行われ、日本青年は日本に関するクイズやけん玉紹介、「ふるさと」の合唱、ソーラン節を披露した。歓送会の最後には出席者全員で輪を作って「朋友」を歌い、感動の締めくくりとなった。

団 長 報 告

平成29年度 日本青年中国派遣

結～日中友好の橋を世代代に（日中两国世代代友好下去）

はじめに

日本・中国青年親善交流事業（以下「本事業」という。）の第39回目の日本からの派遣団（以下「39団」という。）は、11月14日から25日までの11泊12日で、北京、貴州省、深圳、広州の4都市等を訪問し、無事帰国した。

昨年度派遣事業は、事前研修までは予定どおりだったものの、中国側の事情で8月末からの訪問予定が今年3月にずれ込んだが、今年度は、2月の内閣府の交流事業全体の参加青年募集開始時に実施日程が定まっていなかったため、募集自体が調整中として切り離された。その後、ようやく8月に募集開始し、地方選考過程を省略して参加青年を選考、10月半ばに事前研修、11月半ばから訪問という異例づくめの日程となったわけである。

個人的には、かつて本事業を担当する参事官や政策統括官を務めた経験から、事業内容の進化に驚いた一方、日程上の制約に伴う悪影響を感じた面もある。以下では、訪問活動や研修の感想を中心に時系列的に記述し、39団団長としての報告といたしたい。

事前研修（10月14、15日）まで

6月頃団長の打診があった際には、訪問は38団と同じく年明けかとのんびり構えていたところ、8月初に至り11月訪問が固まって、8月末締切の団員募集が始まる。9月下旬、引率部隊（以下「お守り団」という。）の初顔合わせとなったが、副団長の一人が33団の副団長にして26団の団員という経験者であるのは心強かった。

参加青年募集に応え面接等を通過して事前研修で会いまみえたのは21名で、内訳は男性9名、女性12名。中国語が話せる者は3割もいない。社会人は3名（うち1名は在学中）ほどあとは全員大学生だった。ただ、例年見受けることのない来春就職内定者が約半数いたのは、募集選考過程がずれ込んだ結果ともいえよう。

さて、通常は五泊六日の事前研修が一泊二日となってしまう今回。二日といっても半日ずつだから通常の5分の1しかない。外務省職員による中国事情の講座1.5hに加え、（一財）青少年国際交流推進センター（以

下「推進センター」という。）職員によるプレゼンテーションやプロトコールなどの講座が3hで、団研修は6hに過ぎなかった。

団研修は、役割分担の決定に始まって、ニックネーム、ディスカッションの在り方、パフォーマンスの在り方を決め、パフォーマンスの練習を行い、訪問団のスローガンを決めていく中で、自主性・積極性の必要を体得し、メンバー相互の人となりを理解しながらチームワークを構築していくのが眼目である。が、時間がない。ユースリーダーとアシスタントユースリーダーは自薦ですんなり決まったが、各係については、希望者が枠を超えた係から他係に自主的“配転”をお守り団が募って調整してしまった。ニックネームの方は自主申告に委ねざるを得なかったが、男女とも半分以上が実名の名前だ。近時のセクハラ講座で“ちゃん”も必ずしも適切ではなく“さん”付けが望ましい、呼び捨ては論外と言われたのを思い出す。将来での活用を見据えて本人の拒否権ありで他者が案を出すやり方もあるよと言いかけたが、グッとこらえた。パフォーマンスは踊りがソーラン節、歌も何曲か候補が決まったが、時間がないので出発前まで自主練習に委ねるしかない。スローガンも時間切れで、LINEで意見交換しながら決めていくことになった。例年チームワーク維持のためTシャツなどを作っているが今回どうするかも、別途LINEで意見調整となった。

前日昼に初めて出会い、翌日夕刻には終了というあっけなさに違和感が残った。全員のとなりどころか、何人も顔と名前が一致しない者がいたが、後日団員からもそうした感想が聞かれた。

出発前研修（11月12～14日）まで

LINEによる調整は、ユニフォームパーカーの購入とデザイン、名刺のデザイン、スローガンの決定など多岐に及んだが、返信なければ意見なしという役所的な協議手法で詰めていかざるをえず、顔を見合わせながらの本来の調整過程とは自ずから異なり、単なる事務処理に近いものとなってしまった。チャットに参加したのはお守り団を含めて10名ほどではなかったか。

こうした中でともあれ仕上がったスローガンは、「結(むすび)～日中友好の橋を世代代に～」。

これまで築かれてきた日中友好の橋を未来へも結びつないでいこうという趣旨で、中国語の「日中两国世代代友好下去」も加えることになった。

10月末になって、日程に表題だけ入っていた日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラムの内容が伝わってきた。日中関係の発展のために果たすべき青年交流の役割というテーマで、中国側のプレゼンテーションに続き、我が団含め4団体から各10分のプレゼンテーションを行うというものだ。演者は団長が相場と聞いて絶句したが、テーマは確かに参加青年向きではなく、かつて青年交流事業を担当した自分が適任であろうと思ひ直し、研修終了時まで中国語によるパワーポイント資料や読み上げ原稿の作成を何とか仕上げた。

出発前研修は、三日目は早朝空港に向かうだけだから実質1日半ほど。ディスカッションやパフォーマンスの準備、渡航前の諸準備に、本来事前研修時に訪問している六本木の中華人民共和国駐日本国大使館への訪問が加わって更にタイトになったが、大使館訪問自体は極めて有益だった。日本に赴任したばかりの倪健(ニーゼン)参事官[局長級]は、かつて長く本事業の中国側の担当組織である中華全国青年連合会(以下「全青連」という。)の窓口役だったので、旧知の間柄だ。堪能な日本語で、終わったばかりの第19回中国共産党全国代表大会で決まったばかりの新時代の中国構想や新四大発明について説明いただく。「食い違いは当然、こだわるな」「日本の価値観で考えてはいけない」といった団員への戒めが意義深い。若手外交官を交えた立食の昼食交流会までセットされ、大使館訪問すらなかった20年前に比べ、実にありがたいことであった。

訪問国活動(11月14～25日)

中国は、国土面積が日本の約26倍、人口が約11倍である。今回3都市と1省しか訪問しておらず、やや直線的に横切ったにすぎないが、やはり相当に広いと感じた(北京から貴州まで空路3.5h、貴州から深圳まで空路1.5h、深圳から広州まで高速鉄道で30分余の移動)。

天候には恵まれ、貴州で半日霧雨があった以外は、快晴とはいかずとも晴れない曇りであった。気温は、北京と貴州の凱里では日中でも数度とかなり寒かった一方、深圳に到着したら20度を超えているなど、南北の違いをまさに肌で感じた。

日程については、大枠は動かなかったものの細部はかなり流動的で、北京で渡された視察先すら、直前に入れ替わったり、消えたりがあって、“臨機応変”は団の合言葉の一つとなった。

健康管理については、貴州で団員の一人が37度台後半

の熱を発したため、半日休ませ、念のため病院で受診したという程度で、特段の問題は生じなかった。

○北京(11月14～17日)

[11/14]

北京国際空港で全青連国際部趙凌副部长以下の出迎えを受け、ホテルにチェックイン後、伍偉(ウーウェイ)全青連副秘書長主催の歓迎会。全青連の若手幹部や在中国日本国大使館の福田高幹参事官以下も加わった。伍偉氏の冒頭挨拶に、党大会終了直後の“新時代”に向かう中国の意気込みを感じる。なお、チェックイン後や翌早朝、有志で近くの天壇公園を早足で散策したが、寒さの中、トランプや象棋に興ずる老人たちの姿が印象的だった。

[11/15]

午前中は在中国日本国大使館へ。川上文博広報文化部長から最近の中国事情の説明を受けた。改めて、高速鉄道、モバイル決済、シェア自転車、ネットショッピングという中国の新四大発明の話聞いたが、我々は今回の訪問でそれを目の当たりにすることになる。ただ「発明」は、「創造的発明」というより“爆発的普及”だろうか。

午後は、北京大学で、「起業」と「ボランティア」について意見交換を行った。中国側が主として日本語専攻だったため、小グループごとの日中双方のプレゼンテーションを聞いた限りでは、割とスムーズに意見交換ができたようだった。次いで、中関村起業通りでは、期間限定でスペースを借りる等の支援を得て、ネットショップなどを創業した企業の説明を受けた。

[11/16～17]

午前中は、日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラム。汪鴻雁全青連副主席、鳩山元総理、周恩来元首相の姪の周秉徳氏の基調講演の後、中国側から2教授が近時の歴史分析や新時代の在り方等について格調高く講演を行なった。次いで日本側4団体の一番手が内閣府で、私の出番だ。「第1回訪中派遣団の表敬訪問時の『・・日中两国世代代友好下去』という当時の薄一波副総理の言葉どおり、日中友好は青年の双肩にかかっており、更に次の世代につないでいくべきという未来志向を含んでいる」「世代代云々は我々39団のスローガンでもある」「青年交流は内容が濃く、日中友好の発展のために留学や人的往来では得られない効果があるので拡充すべき」といった内容で、なんとか初体験のパワーポイントによるプレゼンテーションを終えた。フォーラムを締めるに当たって一言と問われ、とっさに「温故知新で歴史を踏まえつつ新しい時代に向かうべき」と答えたことが思い出される。

引き続いてのレセプションには、日本側の団体参加者



日中国交正常化45周年記念日中青年交流フォーラムでの
内閣府関係プレゼンテーション

のほか、北京在住の日本人留学生も招かれており、団員たちも思わぬ交流の機会を得た。パフォーマンス場面では、5人の個人芸の後、我が団のソーラン節が最後を締めくくり、喝采を浴びた。

午後は、汪鴻雁（ワンホンイェン）副主席への表敬訪問。冒頭から共産党全国大会で決まった壮大な新しい中国構想についての「訓話」があった。共産主義は信仰である、党員は無宗教、他の模範でなくして党員たり得ない、といった言葉がまだ記憶に新しい。

訪問後は、予定をやり繰りして天安門広場へ。厳戒の中、その広さを味わう。広場での団員の斉ジャンプの写真は、皆で北京に来たぞという証拠になろうか。次いで、前門大街の商店街を散策。北京での僅かな自由時間だった。

夜は今秋に招へいた中国団の北京在住者等を交えての交流晩餐会。「ふるさと」の合唱は、事前研修後ネットで団員各自が男性パートと女性パートを練習しておき出発前に何回か合わせただけのはずが、なかなかの出来栄であった。翌日は空路、貴州に移動だ。

○貴州省（11月17～22日）

貴州は、中国西南部、広州と雲南省の間に位置し、山や谷が多く平地が少ない。最貧省の一つだが、近年、何兆円ともいわれる投資が続けられて、5年前の地図に計画中との表示すらないにもかかわらず高速鉄道や高速道路のインターが既に供用されていたり、大規模な高層マンション群があちこちで建設されていた。

[11/17]

貴州初日は、午後空港から孔学堂へ。山の斜面に設けられた壮大な博物館的メモリアル施設というべきか。孔子とは直接関係はないにもかかわらず、観光の目玉スポット的に整備したらしい。儒教は儒学であって宗教ではないとの整理のようだが、数百億円レベルの投資に驚く。

次いで、貨車幫有限会社の視察へ。両側の壁一面を、数千はあろうかという点滅する小さなパネル表示が埋め尽くしている。数十人のオペレーターが24時間対応し、全国の空きトラックの需要供給をインターネットで媒介、管理する事業とでもいえるか。純粋に民間資本だけでやっており、北京、上海では失敗したが貴州では成功しているとのことだ。区間と量と日時を示して当事者同士に対価を決めさせる媒介役といっても、基本的に手数料は取らないらしいので、どう経営が成り立っているのかは分からずじまいだった。

夜、ホテルの近くの商店街を散策。夫婦が立仕事で牛や鶏の肉の串焼きを売っている一坪もない店で、何串か買い求めた。みれば大きなQRコードが貼ってあり、地元客は皆スマートフォンをかざして清算していく。アリペイかウェイシンペイらしい。個人は手数料がかからず盗難や偽札の回避のため中国で劇的に広まっているという。百元札を出してお釣りを70元だけ受け取ったら、店の現金箱がほとんど空だったのが印象的だった。

[11/18]

二日目は、貴陽の南方50キロの好花紅村へ。山奥に住んでいた布依族という少数民族の集落を平地に降し、観光施設や居住区を建設して花をモチーフにした観光の村に仕立てたというべきだろう。収入は上がり子供たちの通学は格段に便利になったらしい。ただ、元の集落は壊して跡地に植林したと聞いて、さすがに我が国の限界集落対策への応用は困難と感じた。

午後からホテルに戻り、ホームステイ・マッチングへ。ここで15の世帯に伴われて分かれたが、私のホストファミリーは31歳の貴州省共青団幹部の張（チャン）氏。女性の同僚の星星（シンシン）を伴って、まずは貴陽市の中央を東西に蛇行して流れる南明河の河畔を散策する。ただ、この日のために1年半ほど中国語を勉強したはずが、聞き取りがほとんどできない。英語も通じないため、張がスマートフォンに話しかけ流れる日本語の単語を聞いて私が文脈を想像するか、シンシンに紙に書いてもらって大意を理解するか、という貧弱なコミュニケーション手段で乗り切るしかなかった。ビルの喫茶コーナーで休憩した後は、車で夕食会場へ。他グループ等と一緒に談笑のひとつきを過ごしたが、やっとホームに着いたと思ったら、張の豪華な2LDKのセカンドハウスで、その夜は一人で寝てくれとのこと。こんなホームステイありかとも思ったが、二人の団員も同じパターンだったようだ。3年前の36団のときホームビジット（つまり泊はホテル）で、今回はホームステイになったけれど、子が学生くらいの親子で予備の寝室のある邸宅住まいの世帯が全部は確保できなかったということだろう。

[11/19]

私自身は翌朝近くの飯屋で羊肉入りうどんを食した後、アジア最大の滝といわれる黄果樹大瀑布に連れていってもらって感激だった。片道百キロの高速道路を張が運転している間、シンシンにあらかじめ用意してあった「中国は何回目か」などの想定問答（中国語）を読ませるなどして、ようやくまともなコミュニケーションが図れたのが思い出される。

ホームステイを終え、夜はホストファミリーを招いての食事会。観客を意識してか、団員たちのパフォーマンスに力がこもる。「今回築かれた関係は今日で終わりではない。終わりの始まりでもない。始まりの終わりではない。」という私の締めくくりに、第2次世界大戦終結を評したチャーチル英首相の言葉の転用だが、その後何度も引用されることとなった。

[11/20]

翌日は、貴陽市から200キロ離れた凱里市へ。まずは、布に鉛筆で絵を描き、その上に温めた蠟（ろう）を塗るといって、ろうけつ染めの体験に皆で取り組んだ。ただ、いきなりよりは後刻の視察先でのプロの実演を観てから体験したかった。

次の凱里学院という大学では、学内の博物館の視察後、ろうけつ染めや織物などの民族工芸品を製作する創業センターを視察。次いで、凱里インターネットパブリックイノベーションパークでは、凱里市での電子商取引の発展状況の説明を聞いたり、実際にお茶の電子商取引をしている黔茶故事という数名ほどの会社を経営する学生社長から創業の苦労話を聞いたりした。

さらに、未来城コミュニティセンターという高層住宅マンション群に向かう。中心棟の1階には住民サービスのために事実上の市役所の出張所があった。公営住宅ではなく分譲で、今のところ3割入居に過ぎないが、凱里市の戸籍があれば入れるからいずれ埋まる予定とのこと。管理入室は電子化され、小さなトラブルまでスマートフォンを介して情報管理されている。住民組織は三層構造で、共産党の末端組織、地方自治体の末端組織、日本でいわゆる町内会的組織が一体的に運営されているとのことだった。一画にある「青年之家」では、親が遠くで働いているため愛情不足に陥りがちな子どもの面倒をみるボランティアが活躍しているとのこと。外部から何時でも入れる一画（夜は内部側と錠で遮断）があって、出稼ぎ労働者の子弟のためと、数百着の子ども用のジャンパーが掛けてあった。

[11/21]

翌日は、苗族の居住地区へ。小学校や中学校もある。何台もの小型シャトルバスが100mくらいの高低差のある客溜りを結んでいた。雷公山という山の中腹にある大きな集落全体を本格的に観光地化したらしく、全体を

「西江苗族博物館」と呼称していた。

貴陽に戻って、貴州の青年連合会との意見交換。中国側からは、社会主義の新時代を迎え、農村の学校教育や百万人に及ぶ留守宅の子どもへの精神的支援に光を当てた国家プロジェクトの話があった。2015年に始まり、学生を卒業後2、3年、ボランティアとして農村に行かせるというものだ。一定の所得も保証し、政府の採用過程では、そうした現場経験に着目するといったインセンティブも付与しているとのことだった。

[11/22]

翌朝は、空路深圳へ。機内の新聞記事に「市の救助隊が、摂氏4度の寒さの街頭で野宿している出稼ぎ労働者に、支援センターに行けば無料で泊まると勧めたところ、『野宿は慣れている。夜中の2、3時にトラックの荷物の積み下ろしを手伝え、多い日で100元稼げるのに、センターに行けば稼げない』と断られた」とあったのが印象に残った。

○深圳（11月22、23日）

[11/22]

昼に深圳空港に到着し、そのゆったりとした広さや高さに驚く。設備も真新しい。40年前は漁村にすぎなかったのに、今や1千万人を超える大都市だ。東西に延びる4本の幹線道路は片道5車線プラス側道で、南北の主要道とは立体交差。信号機の少なさに目を見張ってしまった。

午後は前海深港合作区へ。前海地区の今後の壮大な建設構想の展示場と前海深港の青年夢工場を視察した。地形的な制約から南北方向には展開できないため、前海という西側の沿岸部を埋め立て、地下5層に及ぶ高速鉄道、高速道路等の交通インフラの上に、多数の大規模なオフィス棟を建てるのだという。夕方から錦繡中華民俗文化村でパフォーマンスを観賞した。



前海地区展示場での記念撮影

[11/23]

翌朝は、まず騰訊会社（テンセント）でインターネットによる総合的なサービス状況の説明を受ける。特定した被写体をカメラ映像が追いかける試作ロボットのデモンストレーションに、AIによる車の自動運転のニュースを思い出した。

続いて大疆創新科技有限公司（DJI）では、現在日本でも関心の高いドローンの様々な実物の説明を受け、実際の作動状況を目の当たりにして団員たちがどよめいた。写真・動画の撮影や農薬散布など大いに活用が期待されるが、高周波というか、空気を切り裂くプロペラ音の高さに、こっそり撮影されることはないかと安堵する。

午後は、深圳湾起業広場という起業支援エリアへ。VR（バーチャルリアリティー）の活用など、最新の起業の企画の説明を受けた。

○広州（11月23～25日）

[11/23]

深圳北駅から広州南駅までは30分余り。両駅ともホームが数百mと長い上に構内も広く、日本との彼我の差を感じた。夕食後、花城広場や海心沙（アジア競技大会の開会式会場）を散策。趙凌が会員とかで、話題のシェア自転車にも乗ってみた。スマートフォンをQRコードにかざせばロックが解除される仕掛けだ。空気式でないゴムタイヤは想像よりも重くなくて、普通にこげた。

[11/24]

翌朝は广汽本田汽車有限公司（広州ホンダ）工場の視察に向かう。1000人強の社員のうち日本人は50人とか。工場内の見学後に懇談の場が設けられ、同時通訳していただいて、質問に花が咲いた。工場見学の際、全員にワイヤレスイヤホンが配られ、日本語での説明があったが、中国の各地視察先で日本側がこうしたツールを用意



中山大学での記念撮影

できていたなら、より円滑な視察になったろうにと感じたのは私だけではあるまい。

午後は辛亥革命の立役者、国父孫文が創設した中山大学へ。日本亡命中に中山という名字を気に入、「孫中山」を自分の名前として使ったことに由来するらしい。豪商梅屋庄吉が孫文に莫大な財政支援をしていた逸話は知っていたが、大学の名称にまでなっているとは存じ上げなかった。大学での座談交流は、北京大学とは違って日本語が共通語とはいかず、コミュニケーションを図るのに苦労したようだ。

広州の夜が中国派遣団の最後の夜ということで、広東省の青年連合会主催で盛大な送別会を開いていただいた。中国民俗楽器やギターの演奏に応じて、我が団もソーラン節や、ふるさと合唱でパフォーマンス。会を追うごとに相当磨きがかかってきた。

ホテルに戻って、北京から同行いただいた方への感謝の会が催される。各地の青年連合会の担当者との連携を上手く調整してくれた趙凌、各地視察先での様々な解説を真面目に全部通訳してくれた崔斌、全団員のニックネームを覚え、バス内やホテルでの確に行動指示してくれた徐川の3人には、本当にお世話になった。

[11/25]

最終日は、当初の視察予定が流れて、直接広州国際空港へ。午後の便で帰国の途につき、夜、羽田に無事到着した。

帰国後研修（11月25、26日）

ホテルに着いたのは午後9時近く。当日は休むだけとなった。

翌日、チェックアウト後、都市センターホテルに移動し、午前中は、団員は評価シートの記入や成果発表の準備、お守り団も中国滞在期間を振り返った。続いて、昼食を兼ねて帰国懇談会。岡山での既参加青年同窓会、日本青年国際交流機構（IYEO）の全国大会の二日目に当たったため、内閣府、推進センター、IYEOの幹部はほとんどいない。元団長二人と数名の関係者を交えての寂しい会となった。IYEOの事後活動の説明後、和田昭夫青年国際交流担当室長が岡山から帰着し、成果発表と参加証授与式が行われる。成果発表といっても、写真をつなぎ合わせてコメントするだけだったのは仕方ない。私は最後の挨拶の中で、中曽根元総理の「三縁主義～結縁・尊縁・随縁」を引用して、団のスローガンの「結（むすび）」との符合を示唆しつつ「縁を結んだからには縁を尊び縁にしたがうべし」と団員たちに呼びかけた。

最後の事務説明が終了後、今後の段取りを話す余裕がほとんどない中、改めて39団全員が集まった。私から個

別に参加証を渡した後、一人一人から順に振り返りの1分間スピーチ。何かしら熱いものがこみあげてくる。会議室は16時撤収厳守のところ、全員が語り終えたら丁度16時で、ロスタイム入り。廊下の広がった一画で、お守り団5人の各人に団員たちから記念の寄せ書きが手交され、名残りが尽きない雰囲気の中、解散となった。

本事業の総括

○本事業は、40年近くにわたり、時に政治的に両国間の緊張関係が高まった中においても、両国の共同事業として日中友好の発展を第一義に継続して実施されてきており、その点だけでも充分意義があるものといえよう。中国側も大組織の全青連が真摯に取り組んでくれていることを直に感じた。なお、来年も日中平和友好条約締結40周年に当たるから、象徴的に何か本プログラムに付加されることはあり得ると考える。

○一方、名称は親善交流事業のままであっても、この数十年來、内閣府青年国際交流事業全体のプログラムの進化の流れが国際親善から国際交流、更には国際理解へとという方向にある以上、言葉の壁は何かしら乗り越えていくしかない。プログラムも20年ほど前と比べれば、ホームステイや大学交流が加えられて、相当進化したものとなっているが、更なるプログラムの見直しと参加青年の質の確保が求められよう。

具体的には、大学での交流には、テーマが起業やボランティアであれば、日本の現状を簡潔に紹介した対訳付きの資料を事業実施サイドで用意しておき、事前研修でそれを基に色々個性を加えたプレゼン手法や議論の在り方を話し合うといった下準備ができないのか。自主性、自立性を養う観点から、ロジは支援するがサブは支援しないという考え方は硬直的に過ぎよう。加えて、現地ではグーグル等による検索で情報を得ることもできないことも考え合わせてほしい。時間の乏しい中で効果的な準備を進めるために何が望ましいかという観点が不可欠と考える。なお、せっかく大学に行くなら、学生食堂で一緒に食事するなどできるだけ接触時間を長くとれるような工夫を望みたいという北田副団長の意見も付記しておきたい。

更には、参加青年には、日常会話程度の中国語能力が望ましいし、せめて英会話能力はほしい。今回ホームステイや大学交流では専ら英語で通じた者もいた。北京大学で日本語専攻の学生と交流できたことは評価できるが、事業を通じて得た日本語が話せない友人(候補)と事後いかに交流を続けられるかは相当程度中国語能力にかかってくる。かつてと異なり、今やWeChat(微信)で、LINE同様に無料で手軽に連絡を取り合えるし、写真も交換できる時代であることを選考に当たって考慮すべきであろう。

○今回、中国側の事情で募集時期がずれ込み、募集期間を大幅に短縮せざるを得ない中、できるだけ多くの応募者の確保のためにと、訪問本体以外の事前研修、帰国後研修を土日に限定し、出発前研修を日曜に開始したことは誠に遺憾であった。事前研修は自主性自立性を養う場であり、出発までの準備の基礎となる場、帰国後研修は訪問活動を振り返り今後の事後活動の進め方を考え学ぶ場であり、共に最低月曜までの二泊三日は不可欠であったし、出発前研修も、事前研修が短すぎた上に大使館訪問をずれ込ませることを踏まえれば1日早く土曜に始めるべきであった。一種の危機管理であるが、事業のあるべき姿まで変えて実施したことは反省すべきであり、今後の先例とすべきではないと考える。

○ともあれ、第39回中国派遣団の事業自体は、無事終了した。改めて、全青連その他の中国の関係団体・関係者、内閣府、推進センター他の関係者、そして副団長・渉外担当の事業実施に当たっての御尽力に感謝申し上げます。今回の様々な制約にかかわらず、今後、団員たちが、今回の事業参加を人生のターニングポイントとして、日中友好そして我が国社会の更なる発展のために活躍されることを祈念してやまない。(文中敬称略)

(内閣府注)

平成28年度事業は、当初、日本青年海外派遣が平成28年8月に予定されていたところ受入側の中国の国内事情により直前に延期され、その後の内閣府と中国側との調整により平成29年3月に実施された。中国青年日本招へいは実施されなかった。

このような経緯を踏まえ、平成29年度事業では内閣府は実施の有無について中国側との確認・調整を行い、実施が確定したのは7月であった。実施確定から派遣・招へいの実施時期までの時間が例年よりも非常に短く、日本代表青年募集や各研修などの実施に一定の制約があった。